

## 此岸と彼岸の世界観

### — M. エンデ、キリスト教、現代日本民俗 —

中 里 巧

#### 1. 此岸と彼岸の関係構造— M. エンデ思想（『はてしない物語理解』）の構造

死生観の構造は、基本的に彼岸と此岸とから成立している。この構造について思索を進めるにあたって、M. エンデ Michael Andreas Helmuth Ende (1929-1995) の内面世界と外面世界の関係性について、とりわけ、M. エンデ著『はてしない物語』*Die unendliche Geschichte* (1979)<sup>1</sup> をとおして考察する。その理由は、宗教的な営みを含む精神の働き全般に見られる内面世界と外面世界の関係性について着目すべき諸点が見られるからである。なお、『はてしない物語』を取り上げるにあたって、『はてしない物語事典—ミヒヤエル＝エンデのファンタジーエン—』*Michael Ende Die unendliche Geschichte -das Phantásien-Lexikon* (2009)<sup>2</sup> が参考になるので、併せて参照する。また、エンデ思想におけるファンタジー Phantasie 理解については、『ミヒヤエル＝エンデ—ファンタジーに賭ける／勇ましきのための宣言—』*Michael Ende -Mehr Phantasie wagen / ein Manifest für Mutige-* (2019)<sup>3</sup> が参考になる。

『はてしない物語』の概要は、本の中の世界、すなわち物語世界である「ファンタジーエン」Phantásien と呼ばれる内面世界の危機を、本の読み手である少年が、回避する話である。現実世界としての外面世界の苦悩や矛盾を抱えた少年バスタアン＝バルタザール＝ブックス Bastian Balthasar Bux が、「虚無」das Nichts に侵されて形骸化しつつある内面世界に新たな意味を与え、空白化して空疎となりつつある物語の言葉に生命を吹き込み、新鮮で生き生きとした言葉に甦らせる物語である。内面世界である「ファンタジーエン」は、「幼（おさな）ごころの君」die kindliche Kaiserin と云う名前の女王が支配している。しかし、「幼心の君」は病に伏して、子どもの純粋な心を失い始めている。「幼心の君」を救うには、人間の子ども（純粋な子供のころをもった読者）が、新たな名前を

1 *Die unendliche Geschichte*, von Michael Ende, Thienemann Verlag, Stuttgart/Wien, 1979 (2004). ミヒヤエル＝エンデ著 上田真而子・佐藤真理子訳『はてしない物語』、岩波書店。

2 *Michael Ende Die unendliche Geschichte -das Phantásien-Lexikon*, von Roman und Patrick Hocke, mit Illustrationen von Claudia Seeger, Thienemann Verlag, Stuttgart/Wien, 2009). ローマン&パトリック＝ホッケ編著 丘沢静也・荻原耕平訳『はてしない物語事典—ミヒヤエル＝エンデのファンタジーエン—』、岩波書店、2012年。

3 *Michael Ende -Mehr Phantasie wagen/ ein Manifest für Mutige-*, von Michael Ende, Thiele Verlag, Wien und München, 2019.

「幼心の君」に与えるしか方法がない。要するに、読者が「ファンタージェン」という内面世界に、新たな生き生きとしたイメージを創造して与えなければならない。M. エンデは、どんなに苛酷で絶望的な状況であっても、子どもに対して、希望や期待を抱いている。M. エンデは、人間精神の深層に「永遠に幼きもの」das Ewig-Kindliche<sup>4</sup>を見出しており、この「永遠に幼きもの」の発動によって、人間は本来の人間性を維持していくと考えている。

しかしながら、現実の日常世界である外面世界自体が、少数者の我欲によって、住みにくく、希望のもてない世界になっていて、苦悩に勝てず、絶望した者が増えているのではないだろうか。こうした外面世界は、内面世界以上に病んでいるのではないだろうか。子どももまた、DVなど、傷つく者が増えているのではないだろうか。こうした状況のなかで、そもそも子どもは、M. エンデの云うような「永遠に幼きもの」を無傷なままもちつづけることができるのだろうか。況してや、成長して大人になった者はなおさら、「永遠に幼きもの」をもちつづけることは困難なのではないだろうか。M. エンデは、戯曲『ハーメルンの死の舞踏』*Der Rattenfänger. Ein Hamelner Totentanz* (1993)<sup>5</sup>のなかで、世界が崩壊する只中、虐げられて傷ついた子どもたちだけが未来への扉へ入って行って、助かる様を描いている。M. エンデにとって、子どもは虐げられ傷ついてもなお、「永遠に幼きもの」を失うことのないほとんど唯一の希望なのであった<sup>6</sup>。

トラウマの世代継承論やキリスト教の負い目とも関係しているように思う。外面世界のバスタチアンは、母親を亡くしたばかりで、父親と二人きりの生活になってしまい、寂しく

4 ミヒャエル＝エンデ著南美知子・木戸芳子編著『Warum schreibt man für Kinder? (子供の世界)』、同学社、1987 (1994) 年のうち、9 頁。本書は、1986 年 8 月、国際児童図書評議会 (IBBY) 大会が東京において開催されたおり、M. エンデがおこなった講演である。講演題目は、「なぜ人は子供のために本を書くのか」*Warum schreibt man für Kinder?* であり、M. エンデは、自分自身の心のなかに住んでいる子供（「永遠に幼きもの」das Ewig-Kindliche）のために物語る、と云っている。

5 *Der Rattenfänger. Ein Hamelner Totentanz - Oper in elf Bildern -*, Libretto von Michael Ende, Weitbrecht, Stuttgart & Wien, 1993. ミヒャエル＝エンデ著佐藤真理子・子安美知子訳『ハーメルンの死の舞踏』朝日新聞社、1993 年。

6 「ハーメルン市」Hamelin として象徴されている世界が大人たちの愚かさによって崩壊する直前、傷ついた子どもたちは、世界の崩壊から免れるため、救済されて別の世界へ招かれていく。「男は最後にもう一度、笛を吹きはじめる。丘が、ゆっくり開き、その裂け目から、黄金色の光が射してくる。子どもたち、驚嘆してそれを眺めているが、やがて順に立ちあがり、夢見るように裂け目の中へ入っていく。初めはぼつりぼつりと、ついで二人一緒に、あるいは何人かのかたまりになって。／いちばん幼い子どもが、途中で引き返し、笛吹き男と一緒に連れていこうとする。男は首を横に振り、子どもに笛を渡す。子どもは、うやうやしくそれを受け取り、丘の中へと運んでいく。笛は、ひとりでに鳴り続ける。裂け目が閉じはじめる。笛吹き男は、黒い影のように、その前に立ちつくす。／足萎えの少女を背負った盲目の少年がたどりついたときには、裂け目はすでに閉じている」(ミヒャエル＝エンデ著佐藤真理子・子安美知子訳『ハーメルンの死の舞踏』のうち、305～306 頁)。„Der Spielmann beginnt noch ein letztes Mal zu spielen. Langsam tut sich der Berg auf, aus dem Spalt dringt goldenes Licht. Die Kinder sehen es mit Staunen, eines nach dem anderen steht auf und geht wie träumend hinein, erst einzeln, dann zu zweit oder in Gruppen. /Das kleinste der Kinder dreht sich noch einmal um, geht zum Spielmann und will ihn mitziehen. Er schüttelt den Kopf und gibt dem Kind seine Schalmei. Das Kind nimmt allein weiter. Der Berg beginnt sich zu schließen. Der Spielmann steht wie ein schwarzer davor. /Der blinde Junge mit dem lahmen Mädchen auf dem Rücken will den Spalt noch erreichen, aber sie kommen zu spät“ (S.76 in *Der Rattenfänger. Ein Hamelner Totentanz - Oper in elf Bildern -*, Libretto von Michael Ende).

傷ついている。学校の友達からも虐められていて、居場所がない。カール=コンラート=コリアンダー Karl Konrad Koreander 古書店に、いじめっ子たちから逃れて忍び込み、「はてしない物語」というファンタジーを盗んで一気に読みすすめて、内面世界の冒険をするなかでバスチアンは、心が少しだけ大人になっていく。おそらく、内面世界に生まれた妖精たちは、成長しないのだろう。内面世界は、それ自体の中では、成長はなく、いずれ枯渇する。内面世界それ自体は、広大な複層世界ではあるが、それ自体に変化はなく、いずれ空白化する。

内面世界は、夢の世界に似て、外面世界ではできない、古代の記憶・未来の世界・冒険・不可思議な体験など、さまざまな体験ができる。しかし、そこに没入して外面世界に復帰しないのは、精神の退廃であり、ファンタジーエンから出てこれなくなって閉じこもりになるのは、成長ではない。人間だけが、外面世界と内面世界を往き来できる。この往き来によって、本人のみならず、内面と外面の二つの世界それ自体も、一新される。ファンタジーエンはファンタジー Phantasie を有する者（幼心をもった者）にとっては自由に無限に広がる意味の世界だが、外面世界は、一見するかぎり Phantasie によっては思うようには行かない世界である。しかしながら、内面世界の冒険をへて心の成長を遂げた者は、外面世界を新たな観点から受容することによって、外面世界を変えることができる。内面世界は、単独では、いずれ意味が枯渇して生命が孤絶する。外面世界も同様である。外面世界の者だけが、内面世界でさまざまな体験をすることによって新たな意味（生命）を内面世界に付与するとともに、外面世界に立ち返ることによって、外面世界にも新たな意味（生命）を付与することができる。

エンデにおいては、だから、外面世界と内面世界とでは、外面世界の方が、言い換えれば、外面世界の子供それも、幼心を持った子供が優位する。外面世界の人間の子供の幼な心が、内面世界の幼な心に転写されて、新たな物語を作り出す（内面世界で冒険する）<sup>7</sup>。

7 ローマン&パトリック=ホッケ編著丘沢静也・荻原耕平訳『はてしない物語事典—ミヒヤエル=エンデのファンタジーエン—』のなかの項目「物語ること（語り）」das Erzählenで、興味深いことがいくつか指摘されている。「バスチアンはどんな本でも片っ端からむさぼる読書の虫として描かれる。物語のなかへ彼は読むことを通じて連れ出される。また、くりかえし彼自身も物語を語る。……物語ることはミヒヤエル=エンデにとって、とくに重要な創造的プロセスである。／ミヒヤエル=エンデは、たとえその外の現実が題材になるとしても、その外の現実に対応する内なる調和をもったイメージの世界を展開させたいと思っていた。通常の語りの論理から抜け出して、因果律の論理がもつ理由づけの拘束から自由になろうと努めた。因果律の論理はすべての出来事にいつでも原因・理由を求め、読者を置き去りにするものなのだ。因果律の論理から自由な物語を、ミヒヤエル=エンデは『鏡のなかの鏡』でたくさん作りあげた。／エンデの語りで特徴的なのは、空間と時間の次元がほやけることだ。——シュルレアリスム風に至るまで。エンデの描く世界は、空間と時間がはてしない、そんな場所にある。……『はてしない物語』はくりかえし、語りの線の構造を突破する。……『はてしない物語』は、実にさまざまな種類の国民の文学とつながりを満載している。これには理由がある。ファンタジーエンは、ファンタジーの王国であり、ファンタジーは、つまるところ、すべての人間が共有する物だからだ。だからバスチアンが、自分自身のファンタジーが生み出したもの以外に、どこかで、一度読んだことのある者たちと何度も出会ったとしても不思議ではない。／と同時に、ミヒヤエル=エンデの文学では、「個人」という考えに特徴がある。というのも、主観的イメージーションは、伝達不可能なものだからだ。万人向けの処方箋はない。あるのは、個人ひとりの学習プロセスであり、個人ひとりの成功や失敗だけだ。ミヒヤエル=エンデは、政治的イデオロギーをこころのそこから疑っていた。夢が個人ひとりのものであるよう

内面世界の幼心の君は、新たな冒険を作り出すことはできない。こうした世界観の背景には、ミヒャエル＝エンデの父親エドガー＝カール＝アルフォンス＝エンデ Edgar Karl Alfons Ende (1901-1965) の画風があるだろう。エドガー＝エンデの作品の大半は、幻想的－幻視的なものであり、作品を制作するとき、エドガー＝エンデは、アトリエを暗幕で暗くして瞑想して、内なる眼に現れる事物や世界を描いたのであった<sup>8</sup>。

ミヒャエル＝エンデにとって、キリスト教の聖書のように、人間を超えた絶対的実体というようなものは、おそらく、存在を否定することはないけれど、ファンタジーによっては把握不可能なのであろう<sup>9</sup>。ファンタジーが極めることのできるのは、此岸と彼岸の融合ないしは此岸と彼岸が交差するような幽玄世界であり、この幽玄世界は此岸でも彼岸でも

に、彼の芸術観も個人ひとりのものである。／エンデはポエジーをくりかえし夢にたとえた。彼によれば、夢と同じく、ポエジーは外側の世界のイメージを内面世界のイメージに変化させる。つまり、ポエジーの助けをかりながら、人間は世界のイメージをつくり出し、そうやって世界を人間の住めるものにする」(164～167頁)。また項目「夢」der Traumでは、次のような指摘がある。「夢はロマン派の文学では、きわめて特別な役割をはたしている。ロマン派はエンデにとって大切なインスピレーションの源だったので、このつながりに驚きはない。夢というものは、目覚めているときの体験と同じぐらい現実的なものだ—ただし、言うまでもなく別次元での話だが—という考えは、ロマン派に由来する。……夢は、無意識の、したがって非常に働きかけの強い次元で、私たちとかかわりあう。そういうわけで、夢は古代宗教では特別かつ予言的な意義をもっていた。……ファンタジーエンは人間の忘れられた夢の上に建設されている。ここから、ファンタジーと無意識とのつながりが見てとれる。ファンタジーは自然にわきあがってくるもので、しつけやエチケットによってはゆがめられないというわけだ」(168～169頁)。

8 *Die Archäologie der Dunkelheit. Gespräche über Kunst und das Werk des Malers Edgar Ende*, von Michael Ende mit Jörg Krichbaum, Weitbrecht, Stuttgart 1985. ミヒャエル＝エンデ・イェルク＝クリッヒバウム著丘沢静也訳『闇の考古学—画家エドガー＝エンデを語る』、岩波書店、1988年を、参照。併せて、*Edgar Ende - der Maler Geistiger Welten, eine Monographie-*, herausgegeben von Jörg Krichbaum, mit Beiträgen von Wilhelm Gauger, Gottfried Knapp, Jörg Krichbaum, Johann Hbeinrich Müller, Reinhard MüllerßMehlis, Helmut Rauhut, Lothar Romain, Wieland Schmied, Rein A.Zondergeld, Edition Weitbrecht, Stuttgart & Wien, 1987を、参照。

9 「田村都志夫：人間の生において、行われたことには、時を超えた「実体」のようなものはないのでしょうかねえ……。

エンデ：つまり、そこで感じるのは、すべては心ならずも起きる遊びだということです。この遊びは絶え間なく人間を巻き込む。ただ、これはのぞまずしての遊びだから、人はいやいやそれをする。自由意思で遊ぶのなら、それを通じて、軽快さがそこに与えられるのだけれど。

こう話すと、わたしはまた倫理めいたことを言っているように聞こえるかもしれませんが、そうではないのです。

田村都志夫：枠をもう少し広げてみて、人間の人生というものも、また遊びなのでしょうかね？ そう言ってもよいのでしょうか？

エンデ：ええ、そう言えるでしょう。遊びを、なにかふまじめなこととらなければ、ひとの人生も遊びだと言えます。……それどころか、私は聖なる「遊び」というものさえあると思っています」(ミヒャエル＝エンデ・田村都志夫 [聞き手・編訳] 『ものがたりの余白—エンデが最後に話したこと—』、岩波書店、2009 (2012) 年のうち、46～48頁)。

ミヒャエル＝エンデの云う「遊び」das Spielの背景は、父であり画家であったエドガー＝エンデのシュールレアリズム、ルドルフ＝シュタイナー Rudolf Steiner (1861-1925) の人智学 Anthroposophie、カール＝グスタフ＝ユング Carl Gustav Jung (1875-1961) の深層心理学や元型論、ドイツ＝ロマン派など多岐にわたるが、ロジェ＝カイヨワ著『遊びと人間』(ロジェ＝カイヨワ著多田道太郎・塚崎幹夫訳『遊びと人間』講談社学術文庫、講談社、1990年)における「遊び」の四つの要素(賭け・狂気・競争・仮面性や演劇性)は、ミヒャエル＝エンデの「遊び」について探求するうえで、大変参考になる。「遊びを支配する基本的態度—競争、運、模擬、眩暈—は、それぞれ切り離されて現れるとは限らない。たびたび繰り返したように、それらの魅力はたがいに組合わされて出てきやすい。……①競争＝運(アゴン＝アレア)・②競争＝模擬(アゴン＝ミミクリ)・③競争＝眩暈(アゴン＝イリンクス)・④運＝模擬(アレア＝ミミクリ)・⑤運＝眩暈(アレア＝イリンクス)・⑥模擬＝眩暈(ミミクリ＝イリンクス)……」(ロジェ＝カイヨワ著多田道太郎・塚崎幹夫訳『遊びと人間』のうち、126頁)。カイヨワによれば、③は理論的にあり得ず、②と⑤は偶発的に存在し、①と⑥は、本質的に結びつきやすい(ロジェ＝カイヨワ著多田道太郎・塚崎幹夫訳『遊びと人間』のうち、127～134頁)。

ない、その間に存在するであろう。死者の靈魂が観衆（生者）と出会う能（夢幻能）舞台の幽玄と、ミヒヤエル＝エンデの世界観は、類似するところがあるように思われる。

## 2. 此岸と彼岸の関係構造—キリスト教の場合—

キリスト教における此岸と彼岸の関係構造は、古代オリエントの土着的死生観・ユダヤ教・古代ローマ帝国の土着的死生観・ミトラ教・中世ケルトやゲルマンの民俗文化など多方面から重層的な影響を受けて成り立ってきたであろうが、教義学的にみれば、イエス＝キリストの併存性に基づいていると云えるだろう。

例えば、正教会のパニヒダ (*panikhida/Mνημόσυνο* 永眠者（死者）) のための奉神礼（礼拝）や聖体礼儀（主日礼拝）の死者の連祷における司祭による祝文では、次のように読誦される。「諸の靈神と諸の肉体との神、死を亡ぼし悪魔を虚しうし、爾の世界に生命を賜いし主や、爾親から寝りし爾の僕（婢）の靈を、光る處、茂き草場、平安の處、病と悲と嘆との遠ざかる處に安息せしめ、善にして人を愛する神なるに因りて、彼（等）が、或は言、或は行、或は思にて犯しし悉くの罪を赦し給え、蓋人一も生きて罪を行わざる者なし、唯爾は罪なし、爾の義は永遠の義、爾の言は真実なり。蓋ハリストス我等の神や、爾は寝りし爾の僕（婢）の復活と生命と安息なり、我等光榮を爾と爾の無原の父と至聖至善にして生命を施す爾の神とに献ず、今も何時も世々に」<sup>10</sup>。この祝文は、イエス＝キリストが今なお、地上においては十字架上で苦悶し、黄泉においては死者の靈魂を解放し悪魔を退治し、天上においては父なる神の右に座し、光榮をあらわしていることを、唱っている。イエス＝キリストの存在は、時空を超えてつねに、地上・黄泉・天上の三つの領域に併存していることを示唆しているのである。こうしたイエス＝キリストによる地上・黄泉・天上の併存性が、正教会 Orthodoxy やローマンカトリック Roman Catholic においては、教会論にそのまま反映される。すなわち、教会 Ecclesia はひとつの教会であるが、同時に、時空を超えて三つの領域に併存しており、地上においては「戦う教会」Ecclesia Militans であり、黄泉においては「苦悩する教会」Ecclesia Poenitens であり、天上においては「勝利する教会」Ecclesia Triumphans として、併存しているのである。イエス＝キリストも教会も、ニケア＝コンスタンティノーブル信経（381年成立）<sup>11</sup>ではそれぞれ、一つの唯一なる存在であるが、その併存性はそれぞれ、地上・黄泉・天上に存しているのである。唯一無二なる存在がこのように三つに併存する特性は、神観それ自体に基づくものであり、神の三位一体性（至聖三者、*Αγία Τριάδα*, Trinitas）は、正教会やローマンカトリックの伝統

10 「パニヒダ・埋葬式—単音聖歌譜—」、日本ハリストス正教会教団・東京大主教々区刊行、2006年のうち、13頁。『主日奉事式』、日本ハリストス正教会教団刊行、2014年のうち、250頁。

11 「割れ信ず、一の神、父、全能者……また信ず、一の主、イエス＝ハリストス神の 独生の子……また信ず、聖神、主、生を施す者……また信ず、一の聖なる公なる使徒の教会を」（『家庭祈祷集—正教会—』、日本ハリストス正教会教団、西日本主教教区教務部刊、増補改訂版、2013年のうち、65頁）。

的解釈においては、旧約聖書「創世記」冒頭の 1:1~3 にすでに示唆されている<sup>12</sup>。唯一無二であるにもかかわらず、三つに現れるこの神の不条理な特性が、イエス=キリストや教会の併存性にも本質的な影響を与えているのである。

神のこうした三位一体性やイエス=キリストや教会の併存性は、直観によっても推理によっても、把握困難なものであるが、まさにそうした把握困難のうちこそ、霊性のリアリティは感じ取られきたであろう。此岸と彼岸の関係構造に接触するのは、ドイツロマン派やミヒャエル=エンデにおいては理性や知恵 Vernunft/Weisheit であって、キリスト教においては信仰 *πίστη/fides* である。ミヒャエル=エンデにおいて Phantasie は、理性や知恵による抑制のもとに働く。理性や知恵の抑制のもと Phantasie の十全な働きを以てしても、ドイツロマン派やミヒャエル=エンデが、彼岸世界や絶対的実体というようなものに行きつくことはない。また、ドイツロマン派やミヒャエル=エンデにおいては、此岸でも彼岸でもない、此岸と彼岸の間という幽玄世界以上に進み往くことはない。

近代において、キリスト教の特質を鮮明に示しているのは、S. キルケゴール Søren Kierkegaard (1813-1855) の思想である。キルケゴールは云う。「此の世ではあらゆるものが逆さであって her i Verden er Alt omvendt、私が最善を尽くして、有徳 Dyd であろうと努めれば努めるほど、事象はますます悪くなっていくというキリスト教的理解 det Christelige は、すでに、プラトンの『国家篇』Platons *Stat* にある倫理的なものに関する優れた記述のうちに見出すことができる」<sup>13</sup> (*Papirer*X2A609)。「公正な人(義人) den Retfærdige は、鞭打たれ拷問台に縛り付けられ鎖に繋がれる。その人の眼は光を失い、想像するかぎりのあらゆる拷問の果てに、十字架に釘打たれる。そして人は、此の世で正義と認められるように努力しなければならないが、正義 redfærdig であるためにはどれほど狂気 gal であっても足りないことに、最後の最後にようやく、気づくのである」<sup>14</sup> (*Papirer*X2A610)。キルケゴールのキリスト教的世界観は、プラトンの仮象界とイデア界に似て、此岸(地)と彼岸(天)から成り立つが、プラトンの仮象界とイデア界以上に、キルケゴール思想における此岸と彼岸の関係は倒錯的である。こうした倒錯性は、此の世においては正義の実現は、狂気 gal として見なされる仕方で現れる。神の霊性は天においてこそ、本質そのままに至高性が現れるのであるが、地においては神の霊性は、逆反射して、奈落の底に落とされるように、卑賤なもの Ringheden<sup>15</sup> とされる。こうした此岸と彼

12 「初めに、神は天と地を創造された。地はむなしく何もなかった。闇が深淵の上にあり、神の霊が水のうえを覆うように舞っていた。神は仰せになった、「光あれ」。すると、光があった」(フランシスコ会訳聖書「創世記」1:1~3) (『原文校訂による口語訳』フランシスコ会聖書研究所編・刊行、サンパウロ、2013年)。唯一なる創造神(初めに、神は天と地を創造された)、父なる神(神は仰せになった)、子なる神(光あれ)、聖霊ないしは聖神(神の霊が水のうえを覆うように舞っていた)というように、伝統的には解釈される。

13 s. 436 in bind X2 in Søren Kierkegaards *Paarer* bind 1 - 25, ved Niels Thulstrup, udgivet af Det danske Sprog- og Litteraturselskab og Søren Kierkegaard Selskabet, København, Gyldendal, anden forøgede udgave, 1968-78.

14 s. 437 in bind X2 in Søren Kierkegaards *Paarer* bind 1 - 25, anden forøgede udgave, 1968-78.

15 s.232 in bind 12 in Søren Kierkegaards *Samlede Værker anden udgave*.

岸の倒錯関係構造は、キルケゴールが生前に刊行した仮名著『キリスト教の修練』<sup>16</sup>のなかで子細に展開されている。正義や真実を希求する者は、自らの実存において、正義や真実の価値や意義ならびに自ら自身が見下され蔑まれるという苦しみに、さいなまれる。こうした苦悩を甘受して生きていくことをキルケゴールは、「苛酷な死」Afdødと呼ぶ<sup>17</sup>。

キルケゴールは、正義や真実を探究する者を、「戦う教会」den stridende Kirkeの一員であると云い、「この世界においてすでに勝利している教会 den trimpherende Kirkeの一員であると人は誤解しているが……戦う教会 den stridende Kirke という仕方では、教会は存在しえない……」<sup>18</sup>。「戦う教会は、卑賤の姿 i Ringheden であるキリストへと向かうのであり、キリストへと引き上げられるのである」と云う<sup>19</sup>。

正教会やローマンカトリックにおける伝統的概念である「戦う教会」Ecclesia Militans・「苦悩する教会」Ecclesia Poenitens・「勝利する教会」Ecclesia Triumphansのうち、ルター派プロテスタント Lutheran Protestant は、黄泉にある「苦悩する教会」は認めない。ルター派プロテスタントの保守的信徒であったキルケゴールにおいても、「戦う教会」Ecclesia Militans・「勝利する教会」Ecclesia Triumphans という用語はあっても、「苦悩する教会」Ecclesia Poenitens という用語はない。キルケゴールの場合、近代的キリスト教の特色として、此岸と彼岸の関係構造に、黄泉もしくは「苦悩する教会」Ecclesia Poenitens が脱落しているのである。

「戦う教会」という概念の源泉は、迫害期の初期キリスト教会において一般的であった「キリストの兵隊」という観念にまで遡及することができる<sup>20</sup>。「戦う教会」の構成員である信徒は、単独であって必ずしも現実に会合を開いて相互に交わりをもつわけではない。一度も出会ったり見知ったりしていない間柄であっても、戦う教会に共に参与し共闘でき

16 『キリスト教の修練』 *Indøvelse i Christendom*, Anti-Climacus 著 (1849.7.30) in bind 12 in *Søren Kierkegaards Samlede Værker anden udgave*.

17 キルケゴールは、日誌遺稿のなかで「不死不滅」Udødelighed という標語を付けて、次のように記している。「キケロ Cicero は (『神々の本性について』第2巻 *de natura deorum 2den Bog* の結論部において)、次のように言っている。「神々 Guderne は不死不滅 Udødeligheden なしには人間に対してなら優位性 Fortrin を持たない。しかし、幸福な人生 et lykosaligt Liv をおくるのに、不死不滅はかならずしも必要というのではない」。キリスト教界 Christenheden において人々が、不死不滅を押し付けられて、不死不滅への深い衝動を感じるように思い込まれる有様 Maade は、明らかに、ひとつの大きな混乱 en stor Forvirring である。不死不滅の全貌は、キリスト教 Christendommen とともにようやくはじめて登場したのである。なぜか? なぜなら、キリスト教は人が苛酷に死ななければならないことを要求するからである den fordrer at man skal afdøe。苛酷に死ぬことを可能にし直すために、永遠や不死不滅は固く立っている For at skulle kunne og ville afdøe – ma det Evige og Udødeligheden staa fast。不死不滅と苛酷に死ぬことは、対応しているのである Udødeligheden og de at afdøe svare til hinanden。苛酷に死ぬ苦しみを以てして、不死不滅の希望が生まれるのである Med den Lidelse at afdøe fødes Udødelighedens Haab。けれども、人はキリスト教界において、あらゆるものを不死不滅さえも、詐欺を働いて奪うのである Men man vil i Christenheden snyde sig til Alt, saaledes, ogsaa til Udødeligheden」 *Pap.X4A270-271* (s. 270-271 in bind X4 in *Søren Kierkegaards Paarer* bind 1-25, anden forøgede udgave, 1968-78)。中里巧著『キルケゴールとその思想風土—北欧ロマンティークと敬虔主義—』、創文社、1994年のうち、182頁以下参照。

18 s.223 in bind 12 in *Søren Kierkegaards Samlede Værker anden udgave*.

19 S.232 in bind 12 in *Søren Kierkegaards Samlede Værker anden udgave*.

20 *A History of Pagan Europe*, by Prudence Johe and Nigel Pennick, Routledge, 1995 : p.1)

たのが、迫害期の初期のキリスト教会であった。初期キリスト教会の迫害のさなか、裏切り・スパイ行為・挫折・虚偽・離反・憎しみ・暴力といった様々な事象が渦巻くなかで、一度も出会ったり見知ったりしているわけではない者同士が、互いに素性或顔さえ思い浮かべられないにもかかわらず、相互に祈り合い助け合ったのが、実情だった。また、エジプト北部の山岳域に逃れて洞穴のなかで修道生活を送った、後の「砂漠の修道僧」Desert Fathersの原型である多数の隠遁者 Hermit もまた、ほぼ単独に信仰生活を送っていた。成立としては最も古く、自然発生的に形を整えていったと推定される使徒信条にある「聖徒の交わり」Communio Sanctorum は、「戦う教会」においては、祈りや霊想といった霊的な協働が主体であったと思われる。なお、新約聖書パウロ書簡のなかでも、軍隊・兵隊・武器・武装といった形容が、信仰者の在るべき姿として装飾されている<sup>21</sup>。

キルケゴールはさらに云う。「勝利する教会に対する誤解は、キリスト教 Christendommen の真理性を、結果 Resultat と過程 Vei を区別する真理と考えたことにあり、そうしたキリスト教の真理を結果として考えたことにある」<sup>22</sup>、「戦う教会は、ひたすら生成を続ける i Vorden ばかりであるが、既存既成のキリスト教界 en bestaaende Christenhed は存在するだけであって、決して生成しない」<sup>23</sup>、「この地上にあるかぎりキリスト教会はつねに戦う教会である…戦う教会に対応するのは「単独者」den Enkelte であり、すなわち、霊的かつキリスト教的意味で…キリスト教的戦いはつねに単独者に基づくのである。なぜなら、神の御前においてひとりひとりの人間は単独者であるというのが霊性であり、「集いとしての既存既成の教会」fælleskab は、ひとりひとりの教会構成員がそうでありうるしまたそうでなければならぬ単独者よりも、低次の規定なのである」<sup>24</sup>、「既存既成の集会 Menigheden は、静態であるが、単独者は動態である。なぜなら、この世界における人生は、まさに試練と波乱に満ちた時間であるから、「既存既成の集会」は此岸の時間にはなく、永遠のうちにはじめて生じるのだ」<sup>25</sup>、「戦う教会のみが真理である、言い換えれば、教会がこの世界にあるかぎり、教会は、謙遜 Fornedrelse な姿としてのキリストへ向かっていくのだから、戦う教会に他ならない……勝利する教会でありかつ同時に既存のキリスト教界であるというのは、非真理である」<sup>26</sup>。

キルケゴール思想におけるキリスト教理解は、驚くほど、迫害期の初期キリスト教に近

21 例えば、「わたしたちの戦いの武器は、肉のものではなく、神のためには要塞をも破壊するほどの力あるものである」(「コリント人への第二の手紙」10:4) (『口語訳聖書』(日本聖書協会発行、1954年)。「わたしたちの戦いは、血肉に対するものではなく、もろもろの支配と、権威と、やみの世の主権者、また天上にいる悪の霊に対する戦いである」(口語訳聖書「エペソ人への手紙」6:12)。「ただ、あなたがたはキリストの福音にふさわしく生活しなさい。そして、わたしが行ってあなたがたに会うにしても、離れているにしても、あなたがたが一つの霊によって堅く立ち、一つ心になって福音の信仰のために力を合わせて戦い」(口語訳聖書「ピリピ人への手紙」1:27)。

22 s.232 in bind 12 in Søren Kierkegaards Samlede Værker anden udgave.

23 s.234 in bind 12 in Søren Kierkegaards Samlede Værker anden udgave.

24 s.246 in bind 12 in Søren Kierkegaards Samlede Værker anden udgave.

25 s.246 in bind 12 in Søren Kierkegaards Samlede Værker anden udgave.

26 s.255-256 in bind 12 in Søren Kierkegaards Samlede Værker anden udgave.



い。初期キリスト教においては、絶望的で回復不能な不法や汚れに満ち々々た此岸（地）という、「罪」 *ἀμαρτία* と「負い目」 *ὀφείλημα* の概念によって、彼岸（天）と此岸（地）が融合したり、包摂し合うことは一切ない。キルケゴールに依れば、表層世界における靈性の出現は、つねに何らかの仕方で自己犠牲を強いられることであり、「殉教」 *μαρτυρία* という「苛酷な死」 *Afdød* にいたることだった。

キリスト教思想の特質を最良に物語るのが、新約聖書における初期キリスト教であるとすれば、キリスト教における此岸と彼岸の構造における此岸（地）と彼岸（天）は、徹頭徹尾分裂していて、此岸と彼岸の融合や包摂はあり得ない。究極においては、此岸がいずれ消滅するだけである。また、此岸と彼岸の間という緩衝体も存在しない。初期キリスト教や古来の教会伝承の継承を重視する正教やローマカトリックでは、地上・黄泉・天上という三層構造の世界観が現在なお、保持されているが、近代の産業や科学技術の発達ならびに金融経済の肥大化に伴う、此岸の重力に屈する世界観になると、ルター派プロテスタントやキルケゴールのように、地上・黄泉・天上の三層構造から、黄泉や苦悩する教会 *Ecclesia Poenitens* が脱落して、黄泉や苦悩する教会 *Ecclesia Poenitens* は断片的に、天上や勝利する教会 *Ecclesia Triumphans* に吸収される。

キリスト教神秘主義のなかには、ダンテ *Dante Alighieri* (1265-1321) が『神曲』 *La Divina Commedia* (1307?-1321) で描いたような、地獄下りや煉獄の体験事例や天国を垣間見た事例などが見られるが、ほとんど例外なく、そこに描き出される地獄や煉獄や天国は、此岸（地上）で見出すことのできる風景（実景や心象風景）であって、黄泉そのものや天界そのものを直に体験したとは認めがたいものが大半である。キリスト教における此岸と彼岸の構造は、「罪」 *ἀμαρτία* と「負い目」 *ὀφείλημα* の概念によって徹底的に分裂断絶していて、天使やマリアの出現・幽霊や悪魔悪霊の出没は、あくまでも此岸（地上）における出来事なのである。時空を超えた地上・黄泉・天上の三層構造を往来できるのは、教会の頭であるイエス＝キリスト、その母マリア（生神童貞女）、天使、聖人だけである。また、日本の能（夢幻能）における幽玄世界や、ドイツロマン派やミヒャエル＝エンデにおける此岸と彼岸の間や融合といった中間的特色も、キリスト教にはない。キリスト教における靈性は、社会的－心理的意味位相から見れば不条理であり狂気であるような、浮遊性を帯びている。この浮遊性は、生成に滞留し続けるというキリスト教的生命の在り方なのであるが、如何なる融合や包摂もなされないまま、ひたすら浮遊<sup>27</sup>し、生成し続けるという意味で、限りのない生命そのものであると同時に、どこまでも心理的－社会的位相においては、死にいたるまで狂気として在り続ける。

27 「風 *τὸ πνεῦμα* は思いのままに吹く。あなたはその音を聞くが、それがどこからきて、どこへ行くかは知らない。霊から生れる者 *ὁ γεγεννημένος ἐκ τοῦ Πνεύματος* もみな、それと同じである」(口語訳「ヨハネによる福音書」3:8)。

### 3. 此岸と彼岸の構造—日本人の死生観—

『石井光太著『遺体—震災、津波の果てに—』

東日本大震災直後の釜石市の遺体安置所の様子を克明にルポルターージュして、後に映画化<sup>28</sup>もされた本に、石井光太著『遺体—震災、津波の果てに—』がある<sup>29</sup>。このルポルターージュは、当時釜石市の廃校であった釜石第二中学校（旧二中）の体育館での、遺体安置所で実際に起こったさまざまな出来事やそこに関わった人間群像を、かつて葬儀社に勤務し当時は退職して民政委員であり、この遺体仮安置所の管理をボランティアとして行った千葉淳<sup>30</sup>を軸に、2011年3月12日から閉鎖される5月18日までを、詳細に描いている。なお、著者石井光太（1977～）は、現地に3月14日に入っている。

突然の悲劇に、家族の死を受け入れられない遺族の悲しみや怒りについて、本書は、多数取り上げている。以下はその一つである。

「家族にすれば、肉親の遺体が放置されていることに憤慨するのは当然だろう。松岡（釜石市職員松岡公浩）としても、一刻も早く運んであげたいのは山々だったが、数が多すぎるのだ。人で足りない上に、道が塞がっているせいで、どうにもできないのだ。／このように住民や遺族から怒りをぶつけられたことは一度や二度ではなかったが、なかでも松岡がどうしても忘れられない一件があった。ある日、大渡町の仮置場へ赴くと、三十代の女性が小さな娘の遺体の前で声を張り上げて泣きじゃくっていた。松岡はその女性と面識があり、名前も知っていた。メインストリートから一歩裏に入った路地にある飲み屋街「呑ん兵衛横町」でスナックを営んでいる葉子ママだったのだ。／かつてこの路地はマチの男たちが昼夜問わず賑わっていたものだが、最近では漁師も減り、工場も人員削減が行われていたため、年をとったママが店をたたむことも多かった。そのなかで、葉子ママのスナックは地元の男たちに支えられてますます繁盛していた。／話によれば、この葉子ママは小学6年生の一人娘と買い物をしていたときに津波に襲われたという。真っ黒い濁流が押し寄せてきたとき彼女は物につかまってかろうじて助かったものの、娘は一瞬遅れて

28 映画『遺体 明日への十日間』、監督：君塚良一、脚本：君塚良一、製作：亀山千広、フジテレビジョン、主演：西田敏行ほか、2013年公開。

29 石井光太著『遺体—震災、津波の果てに—』新潮文庫、新潮社、2014年。また、東日本大震災後の霊性について報告している他の本のうち、興味深いものとして以下が挙げられる。東北学院大学震災の記録プロジェクト・金菱清（ゼミナール）編『呼び覚まされる震災学—3.11生と死のはざままで—』、新曜社、2016年。奥野修司著『魂でもいいから、そばにいて—3.11の霊体験を聞く—』、新潮社、2017年。奥野修司著『死者の告白—30人に憑依された女性の記録—』、講談社、2021年。宇田川敬介著『震災後の不思議な話—三陸の怪談—』、飛鳥新社、文庫増補版、2020年。高橋原・堀江宗正著『死者の力—津波被災地「霊的体験」の死生学—』、岩波書店、2021年。佐々木格著『風の電話—大震災から6年、風の電話を通して見えること—』、風間書房、2017年。

30 なお千葉淳は、2020年7月14日10代女性に対する強制性交等の罪の容疑で逮捕されたが、本人は否認していた。その後2021年4月3日岩手県盛岡地方検察庁（盛岡区検察庁）は、県青少年環境浄化条例違反（わいせつ行為）の罪に切り替えて略式起訴し、岩手県盛岡簡易裁判所は罰金30万円の略式命令を出した（東京新聞2020年7月14日、日刊スポーツ2021年4月4日）。

波にさらわれてしまった。目の前で娘が瓦礫とともに流されていく。葉子ママは向かいの市民文化会館の上階に市の職員たちが非難しているのに気づいて叫んだ。／「うちの娘を助けて！ 早くして。娘がなされて死んじゃう！」。／だが、職員たちは誰一人として、津波の流れる道路に飛びこむことはできなかった。濁流の勢いがあまりに強く、近づくことができなかったのである。その間に、娘は波に吞まれて視界から消えてしまった。／葉子ママは助かったものの、後日娘の遺体が発見された。彼女は、市の職員に見捨てられたことで娘は死んだのだという悲憤を抱いたまま、仮置場に横たえられた娘の遺体に寄り添っていた。そのとき、たまたま松岡がマスクをつけた市のジャンパー姿で現れたのである。彼女は気が動転するあまり、松岡のことを娘を見殺しにした市の職員だと勘違いし、烈火のごとく怒りだした。／「この人でなし！ うちの娘を見捨てやがって。どうして助けてくれなかったんだ！」／松岡にとってみたら何のことか意味もわからない。だが、彼女はつかみかかって怒鳴り散らす。／「なぜ見殺しにした！」／周囲にいた同僚たちが間に入って止めた。彼女は彼らをふり払ってなおも口汚く罵る。同僚たちは両手で押さえて、「この人は別の人だから」とか「落ち着いてください」となだめた。彼女は途中で力つきたかのように怒鳴るのを止めると、子どもみたいに声を上げて泣きはじめた。あまりにもとり乱し自分でも何をどうしたいのかわからなくなっていたにちがいない。／松岡はマスクもヘルメットも取らなかった。以前店へは何度かいったことがあったため、葉子ママは自分の顔を憶えているはずだ。マスクとヘルメットを外して「僕です。人違いです」と言えば、わかってくれるだろう。だが、彼女の気持ちを考えると、悲しみに恥を上塗りさせるようなことはできない。松岡にも中学二年の娘がおり、娘を失った親の思いが痛いほどわかったのだ。／同僚の一人が彼女の肩をさすって、「娘さんを安置所へつれていこうな」と声をかけた。彼女は首を横にふって答えた。／「いや、娘とここにいる！ 娘から離れない！」／引き裂かれて離れ離れにされると思ったのだろう。職員はなぐさめるように言葉を加えた。／「お母さんも一緒に来なよ。お医者さんも警察の人もいるから安心だ」／「安置所へなんて、娘を行かせたくない！」／「安置所には屋根がある。こんな寒い道端に置きっぱなしにしないで、娘さんを屋根のあるところにつれていってあげようよ」／彼女はそれを聞くと、ついに観念したように再びむせびはじめた。娘にすがりつき、その顔に付いた砂をハンカチで何度も拭き取ろうとする。安置所に行く前にせめて少しでもきれいにしてあげたかったのだろう。／松岡はマスクとヘルメットをつけたまま、黙ってトラックの運転席に乗り込んだ。うしろの荷台に遺体が乗せられると同時に、葉子ママのすすり泣く声が聞こえてくる。キーを回すと、古い車体がエンジンの振動で揺れだした。松岡は女の子の遺体ができるだけ痛まぬよう、ゆっくりアクセルを踏んで旧二中へ出発した<sup>31</sup>。

31 石井光太著『遺体—震災、津波の果てに—』新潮文庫のうち、100～103頁。

葉子ママは、この後火葬で送り出されるまで、避難場所と遺体安置所を毎日往復して、小学六年生の一人娘の遺体から離れることはなかった。葉子ママにとって一人娘は死んでもなお決して死ぬことはなかった。一人娘の生命の尊さと慈しみは、肉体の死を超えていたのであった。

旧二中遺体安置所の管理を託されていた民生委員でボランティアの千葉淳は、遺体に卑近に声をかけていた。

「千葉は横目で関係者たちの態度の変化を見ながら、自分だけは遺体の名前を憶え、生きている人と同じように接しようと心がけた。朝、まだ薄暗い五時半に旧二中を訪れると、ひょこひょことペンギン歩きで館内を回り、夜気で冷たくなった遺体に一体ずつ声をかけていく。たとえば子どもの遺体には次のように言った。／「ほうや、昨晚はずっとここにいて寒かっただろ。ごめんな。今日こそ、お父さんやお母さんが会いによってきてくれるといいな。そしたら、どんなお話をするつもりだい？今から考えておくといいよ」／また、隣にいる妊婦の遺体にはこう言った。／「ママは、大槌町に住んでいたんだね。一晚、この寒いところでよく頑張ってくれたね。ママのお陰で、お腹のなかにいた赤ちゃんは寒くなかったんじゃないかな。この子はとっても感謝しているはずだよ。天国へ逝ったら、今度こそ無事にお腹の赤ちゃんを産んであげるんだよ。暖かいところで、伸び伸びと育ててあげなよ。そしていつか僕がそっちにいったときに大きくなった赤ちゃんを見せておくれ」／遺体は、人に声をかけられるだけで人間としての尊厳を取りもどす。千葉はそれを重ねることで安置所の無機質で絶望感に満ちた空気を少しでも和らげたかった。／千葉が遺体の尊厳を特に大切にしたのは、かつて葬儀社で働いていた経験が大きかった。千葉は七十年前に大船渡のとある寺院で生まれ育ったが、僧侶になることはなく、若かりし頃は関東をはじめとして各地を転々としていくつもの職を渡り歩いてきた。そして四十年ほど前に流れ着くように故郷の隣の釜石にもどり、タクシー運転手を経て地元の葬儀社に勤めだした。／だが、景気がよかった頃はまだしも、バブルが崩壊し少子高齢化の進んだ港町で取り扱うことが多くなったのは、誰にも看取られずに一人ぼっちで死んでいく老人たちだった。アパートで何ヶ月も見つからずに蛆虫にたかられている死体、体の水分が消えて干からびた蛙のようになった死体、海から上がった魚に喰われた自殺死体、そういった孤独な死の現場に嫌というほど遭遇してきた。遺族はたいてい都会に出ているため連絡がついてもすぐに駆けつけることができない。やむをえず、千葉が腐乱した遺体から蛆を一匹ずつピンセットで取り除いた後に棺に収め、遺族がやってくるまで葬儀社のホールに何日も安置しなければならないこともあった。／千葉はこうした遺体を見る度に、心を痛めた。八十年、九十年、必死になって子供や町のために働いてきてどうしてこんな最期を遂げなければならないのか。千葉は蛆に食い荒らされた孤独な老人をせめて人間らしく扱いたいと思い、遺族が来るまで代わりに自分が遺体に言葉をかけることにした。手が

あく度にホールに収められた棺のもとへ行き、町の近状やその日の出来事を語って聞かせる。そうしていると、穴だらけの変色した遺体が生前のように喜んだり、悲しんだりするように見えたのだ。／今回の津波の安置所で、千葉が遺体と一体一体向き合い、言葉をかけていったのは、こうした過去の体験があったためだろう。かつて見てきた孤独死した老人たちと、安置所に置き去りにされた遺体が重なっていく。だからこそ、千葉は自分が家族の代わりに一体一体に親身に寄り添いたいと思ったのだ。……／母親は死んだ赤ん坊の前にしゃがみ込み、その冷たくなった頬をなでながら、「ごめんね、ごめんね」と何度も謝っていた。若い夫も目を赤くしてうなだれていた。一度帰ったと思ってもまた数十分後には遺体の前にうずくまっていたりする。関係者は近づけずに遠まきに見守っている。千葉はいても立ってもいられなくなり、そっと夫婦の本へ歩み寄った。隣にしゃがみ込んで手を合わせ、やさしい声で遺体に向かってこう言う。／「雄飛君、ママとパパが来てくれてよかったな。ずっと待っていたんだもん」。／雄飛、それがこの赤ん坊の名前だった。／母親は赤く腫らした目で千葉を見つめる。夫が支えるように彼女の肩をつかむ。千葉は赤ん坊に向かって続ける。／「ママは雄飛君を必死で守ろうとしたんだよ。自分を犠牲にしても助けたいと思っていたんだけど、どうしてもダメだった……雄飛君はいい子だからわかるよな」。／夫婦は真剣な顔で聞いている。千葉はさらに言った。／「雄飛君は、こんなやさしいママに恵まれてよかったな。短い間だったけど会えて嬉しかったな。また生まれ変わって会いに来るんだぞ」。／母親はそれを聞いた途端、口もとを押さえて泣きはじめた。子供のように声を上げて号泣する。夫も鼻水をすすりながら目をぎゅっと閉じる。千葉はそれを見ながら、どうか自分を責めずに生きてほしいと思った。／その後も、千葉は家族が遺体の前ですわり込んでいるのに気づくと、自分から間に入って声をかけた。ある家族が故人を探しに来るのが遅れたことを悔やんでいけば、「亡くなったお父さんは来てくれただけで喜んでるよ」と言い、ある家族が遺体の冷たくなっていることを嘆いていけば、「亡くなった方は家族が近くにいと温かさを取りもどすんだよ」と囁く。遺された者が少しでも前を向いて進めるきっかけをつくってあげたかった<sup>32</sup>。

「遺体は、人に声をかけられるだけで人間としての尊厳を取りもどす」という千葉淳の思いは、深く胸に突き刺さる。千葉淳の声かけは、遺体のみならず、そこにいる遺族にも向けられている。遺体安置所において千葉淳は、死者にも生者にも等しく声をかけて、慰め励ましている。そのように一体一体に声をかけ続けていくことによって、死者は人間としての尊厳を取りもどし、生者は悲しみや絶望のただなかで生きていく力を取りもどすのである。千葉淳は、声をかけることをとおして、死者と生者が交わる同一次元へと、人々を連れて行ったのではないだろうか。その同一次元は、此岸でも彼岸でもない幽玄世界としての間なのではないだろうか。また、その同一次元は、此岸のなかで、突如出現しては

32 石井光太著『遺体—震災、津波の果てに—』新潮文庫のうち、214～219頁。

消滅するものなのでないだろうか。

奥野修司著『魂でもいいから、そばにいて —3.11の霊体験を聞く—』

ルポルタージュ作家奥野修司（1948～）は、東日本大震災の二年後から三年半にわたり幽霊譚の聴き取りを現地でおこなった。本書は、遺族に出現する東日本大震災の災害で亡くなった幽霊が、たとえ幽霊であっても如何に愛おしいものなのかを、16の事例をとおして紹介している<sup>33</sup>。

亀井繁（仮名）は、東日本大震災で妻と幼い次女を亡くし、生き残った自分と長女は、父の実家で暮らしている。

亀井繁は語る。「妻と娘が発見されたのは、あの日から二週間経ったところです。二週間ものあの冷たい中に晒されていたのかと思うと、しばらく風呂に入れませんでした。自分だけ温かいお風呂につかるなんて、妻や娘に、ほんとに申し訳ないと思ったのです。／あたりはコンクリートの土台しか残っていない。ここもやがて土盛りの下になるのだろうか。自宅の跡地に立つ繁さんにたずねると哀しそうな顔をした。／「土台だけでもあれば、あのときのことを思い出せます。ここがなくなると、私には慰霊の場なくなるんです。遺族はみんなそう思っています。どっちみち町は人口だって少ないんだし、使い道がないんだったら、いじらないでそのままにしてほしい。亡くなった人と共に生きるというか、遺族はそう思いながら人生の残りを生きたいんです」<sup>34</sup>。

死者と生者の交わる同次元は、此岸のなかに現れるのであるが、その場所は死者と生者に共に意味の有る場所でなくてはならない。

亀井繁は続ける。「仏壇の前には大きな骨壺と小さな骨壺が並んでいた。妻と娘の遺骨だろう。子供を喪った遺族の多くは納骨していない。あの冷たい墓の下に置きたくないという気持ちがそうさせるのだという。繁さんもそうだった。「納骨しないと成仏しないと言われますが、成仏してどっかに行っちゃうんだったら、成仏しない方がいい。そばにいて、いつも出て来てほしいんです」／二人の遺体は三月二十四日に見つかったが、当時は津波であまりに多くの人が亡くなったため、地元で火葬するところがなかった。繁さんも「二人の大切な体を燃やすなんて……」としばらく悩んだが、遺体の傷みから限界を感じて火葬場を探した。そして山形にいた友人の協力で、二十八日に山形で火葬することができたという。不思議な出来事があったのはその日の夜だった。／「どう説明すればいいか……、火葬を終えたあと、友人の家に泊まったのですが、夜中に目が醒めると目の前に二人がいたんです。マスクをしてしゃがんだ妻に寄り添うようにしながら、娘が僕に手を振っていました。ただ映像が、テレビ放送が終わったあとの砂嵐のようにザラザラしてい

33 奥野修司著『魂でもいいから、そばにいて —3.11の霊体験を聞く—』、新潮社、2017年。

34 奥野修司著『魂でもいいから、そばにいて —3.11の霊体験を聞く—』のうち、23頁。

て、輪郭しか見えないんです。ああ、妻と娘が逢いに来てくれたんだと、泣いて手を伸ばしたら目が醒めたんです。この時点ではっきりと夢だとわかりました。あたりを見回し、自分は目が醒めている、友達の家泊まっているんだと確認してからもう一度目を閉じたのですが、目を閉じても砂嵐のような映像が見えるんです。言葉はなかったのですが、ずっと手を振っていました」<sup>35</sup>。

自分や長女や実家の家族は無事であったにもかかわらず、亀井繁にとって、生き残ることは絶望以外のなにものでもなかった。そのなかで、幽霊であっても、亡くなった妻と娘に会えることは、亀井繁にとって代えがたい喜びであり生きがいであった。

亀井繁は云う。「私にとって何が希望かといえば、自分が死んだときに妻や娘に逢えるということだけです。それには魂があってほしい。暗闇の向こうに光があるとすれば、魂があってこそ逢えると思うのです。それがなかったら、何を目標に生きていけばいいのですか」<sup>36</sup>。亀井繁にとって遺品もまた、亡くなった妻や娘の痕跡である。「瓦礫の中から見つかったものは、第三者にすればガラクタにすぎません。しかし、大切な人がこの世に遺していったものと思えば、そのどれもがこの世に存在している意味がある。繁さんも、それらの品々に込められた意味を読み取ろうとしていた。それが繁さんの「生きる力」になっているという」<sup>37</sup>。

さらに亀井繁は語る。

『「いま、会いに行きます』という、映画にもなった本があります。亡くなったはずの妻が、突然家族の前にあらわれる物語です。……しばらく読まずに仏前に供えていたのですが、あるときその本をめくったら、いきなり〈あなたと過ごした十四年間はほんとに楽しかった〉という文字が飛び込んできました。結婚してずいぶん経っているが、何年になるんだろうと数えたら、その年で私たちも十四だったんです。鳥肌が立ちました」／このときも、「なんだか生きているのが嫌で鬱々としていた」そうで、その文字が妻のセリフなのだと思ったとき、繁さんは妻に助けられたと感じたという。／「お医者さんはよく、大切な人を喪うとそのストレスで眠れなくなると言いますが、私は眠ったら妻や娘に逢えると思うから、自分自身が死んだつもりになって寝るんです。夢の中で逢えるという感覚は、二度と叶わないはずのものが叶ったという喜びと同時に、家族がそばにいたときの安らぎや温かい気分を思い出させてくれます。長女の部活を見に行った帰り、車の中で寝ていると、座席の横に妻がいたりすることもあります。触れ合うことも会話することもできないけど、夢の中だけが震災前と同じ気分に戻れるんです。夢でしか逢えないのなら、寝る時間を多くすると逢える時間も多くなって、以前と同じ生活ができるんじゃないかと

35 奥野修司著『魂でもいいから、そばにいて —3.11の霊体験を聞く—』のうち、24～26頁。

36 奥野修司著『魂でもいいから、そばにいて —3.11の霊体験を聞く—』のうち、26～27頁。

37 奥野修司著『魂でもいいから、そばにいて —3.11の霊体験を聞く—』のうち、28頁。

思ったこともありました」<sup>38</sup>。

亀井繁にとって生きがいは、亡くなってもなお途絶しない家族の魂との交流であり、亀井が亡くなった妻と娘への思いは、死者への鎮魂であると同時に、死者による亀井への励ましとなって表れてもいるのである。

著者奥井修司は、次のように結んでいる。「……四人の強い絆は、彼岸と此岸の垣根を越えて結ばれているかのように、ときは姿を見せ、ときには語りかけ、ときには励ましてくれる。たとえ、「つかの間の触れ合い」であっても、先に逝った者が、この世に生き遺った生者に生きる力を与えてくれるなら、こんな邂逅があってもいいだろう」<sup>39</sup>。

#### 奥野修司著『死者の告白 —30人に憑依された女性の記録—』

本書は、看護師高村英が東日本大震災後、30人の死霊に憑依され、住職曹洞宗通大寺金田諦應が浄霊を行った一部始終についてのルポルタージュである。

以下は、高村英に現れた12歳の男子の幽霊の話である。「年が明けて一ヶ月ぐらい経った頃だというから、2013年1月か2月だろう。憑依にも時期があるのか、春の彼岸から秋の彼岸まではよく憑依されたが、秋の彼岸を過ぎると通大寺に行く回数が一気に減ってきた。いわばオフシーズンのようなものだが、12歳の男子の霊があらわれたのはまさしくそんな時期だった。……「さっきからそこにいるけど、どうしたの？」／すると「お寺に連れて行って下さい」と言うんです。「私では駄目なの？」と尋ねると、「はい、和尚さんに話を聞いてほしいんです」と言うのです。……／「和尚さんに話を聞いてほしいんだって？ どうした？ 聞くよ」と住職が言うと、それまでおとなしくしていた男子がいきなり泣き出した。顔をくしゃくしゃにしてすすり泣きながら、とぎれとぎれの言葉を必死につなぎ合わせようとしていた。／「自分は父子家庭だというんです。今も鮮明に覚えているのですが、ちゃんとした仏壇を買うお金がなかったのか、あるいは震災で手に入らなかったのか、仮設住宅には、座卓の上に簡単なお仏壇が置かれ、そこに骨壺や写真、花、食べ物などが所狭しと置かれていました。横の壁には、2011年4月から男子が着る予定だった制服がつるされていました。お父さんは仏壇の前に座ると、話しかけるでもなく、お線香をあげたまま動かないのです。それを男子はじっと見つめていました」。……／「彼は言うんです。「お父さんは、朝どんなに仕事が早くても、ほくのためにご飯をつくってくれました。だから寂しい思いをしたことはありません。父子家庭だったことも不満に思ったことはありませんし、自分が津波で死んだことも納得しています。だって、お父さんは今もほくのことをちゃんと供養してくれているんだから」と。そして、父子家庭だからって、これまで嫌だと思ったことはない、重ねて言いました。／そ

38 奥野修司著『魂でもいいから、そばにいて —3.11の霊体験を聞く—』のうち、29～30頁。

39 奥野修司著『魂でもいいから、そばにいて —3.11の霊体験を聞く—』のうち、35頁。



れを聞いていた住職さんは、「言いお父さんだなあ」としんみりつぶやくと、男の子は泣きながら、「うん」と言ったのです。そして住職さんに尋ねました。／「僕は地獄に落ちますか？ こんな親不孝をしたぼくは、地獄に落ちますか？」／男の子が泣きながら何度もそう尋ねているのが見えました」……／「お父さんは仮設住宅の中でその子を祀った仏壇に向き合っていますが、わが子が亡くなったことに納得できないのか、納骨もしていないんです……「お父さんは、僕がその学生服を着るのをすごく楽しみにしていたのに、ぼく……。ぼくは地獄に落ちるんですか？」／すると住職さんは大きくかぶりを振りました。／「そんなことはない、絶対にそんなことはない。親より先に死んだから親不孝なんて、そんなことがあるはずはない」／男の子は安心した表情で、「住職さんをお願いしたいことがあります」と言うんです。……その男の子はいきなり、「寺の子になりたい」と言ったんです。想像もしなかった言葉に、わたしはびっくりしました／……きっと住職さんわかったのでしょうか。なんで寺の子になりたいんだとはあえて訊かず、「いいよ」とやさしく言いました。／「寺の子になりな。一生に暮らそうな」。／男の子は、自分なんて親不孝をしたんだとずっと悔やんでいました。だから、お寺の子になって、お父さんのために祈りたいと思ったのです。生きているお父さんが、自分の死を乗り越えて幸せになるようにと、祈りたかったのです。／「君とお父さんのために祈るから、一緒に手を合わせような」／住職はそう言うと、その小さな部屋でお経を読み始めた。／「ふと見ると、住職さんの横にその子も正座して、必死に拝んでいるんです。住職さんがお経を読むのに合わせて、生きているお父さんのために手を合わせて、懸命に拝んでいる姿を見たとき、なんだかそれまでとは違った透明な気分になりました。／肉体をなくしても、生きている人のために、死んだ人が祈る世界があるという事実——、わたしにはものすごい衝撃でした」／これまで、僕も津波で家族を喪った人たちから何度も聞いてきて、成仏してほしいとは言わないまでも、もう苦しまないでほしい、私たちのことは心配しないでほしい、あの世も腹いっぱい食べてほしいなどと、生者が死者のために祈るものだと思っていた。／ところが、この男の子は、津波が自分の未来を奪ったというのに、自分の死を悔いることなく、遺された父親のためにひたすら祈っていたという」<sup>40</sup>。

死者が生者を励ます事例は、決して少なくないように私は思っている。亀井繁は、亡くなった妻や娘の幽霊に励まされていたし、それが亀井繁の生きがいであった。高村英と金田諦應が体験した中学入学寸前に震災で亡くなった12歳の男子の事例は、生き遺った父の幸福を寺で祈願する幽霊の話であるが、私には珍しい事例であるようには思えない。東日本大震災復興支援歌として知られる「花は咲く」の作詞者である映画監督岩井俊二は、この歌詞を東日本大震災でなくなった死者の目線から書き上げている。その内容は、死者と生者双方の濃密な鎮魂歌であり応援歌となっている。

40 奥野修司著『死者の告白—30人に憑依された女性の記録—』、講談社、2021年のうち、254～262頁。

日本人の此岸と彼岸の関係構造は、此岸と彼岸の間としての幽玄世界があり、そこに死者も生者も参入していく。この幽玄世界は、徐々にないしは突発的に、此岸のいずれかの場所と時間内に、出現する。その不合理・不条理性<sup>41</sup>は、善悪や生死未分の曖昧を多分に残す幽玄性にあるだろう。

なお、奥野修司は、著作『死者の告白』のなかで、日本人の死生観について動物との共生観など、重要な諸点をさらに指摘しているのので、以下に、取り上げておく。

41 以下きわめて重要な点なので、2021年度雑誌「東洋学研究」所収の中里巧著「キリスト教の呪術性と日本のスピリチュアリズム—現代キリスト教の神秘体験と日本の心霊現象—」のうち、註2をそのまま再録する。

怪奇小説のうち、加門七海の作品には、善と悪の混沌や融合ないし未分化などの局面がしばしば描かれている。加門は、そうした局面の靈性を「鬼」として形象化することが多い。例えば、以下のテキスト参照：『蠱』集英社文庫、集英社、1999年；『人丸調伏令』上下巻、朝日ソノラマ、2000年；『完全版 晴明』朝日ソノラマ、2000年；『大江山幻鬼行』祥伝社文庫、祥伝社、2000年、『祝山』光文社文庫、光文社、2007年。

おそらく加門七海にとって、社会的・心理的位相に属する善悪という枠組みは、それほどのリアリティや説得力をもっていないのだろう。加門にとって善と悪は固定したものでも確定したものでないだろう。ひょっとすると加門は、神の不変性や唯一性について徹頭徹尾疑っているのではないだろうか。加門は、著作のなかでしばしば「鬼」の語源を「隠ぬ」と語って、(1)善悪が明瞭ではない、(2)善悪未分、(3)善悪が自在に変転するのが、鬼という存在である、と述べている。

平安中期の漢和辞書十卷本『和名類聚抄』には、「或説に云ふ於邇は隠者の訛なり。鬼物は隠れて形を顕すことを欲せざるの故を以ての称なり」とあり、「鬼」の字義（『新漢語林』第二版）と同様に、本来、死者の靈を指示していた。「鬼」は隠者の発音が変化した言葉であり、本来、死者の靈を意味した。死者の靈は、隠れることを欲するゆえに、隠者であり鬼なのである。加門は、鬼のこうした隠れる性質を独自に解釈して、善悪という倫理の本質さえ隠しているのが鬼である、と理解しているのである。

前田富祺監修『日本語源大辞典』（小学館、2005年）のうち、「鬼」の項目の語源説①として、「隠」の字音から転じた語<和名抄>。オニは古語ではなく、古くは、神でも人でもない怪しいものをモノといい、これに適合する漢字はなかった。モノは常には人目に見えず隠れているということから、オン（隠）の字音を用いるようになり、オニと転じた<東亜古俗考=藤原相之助>という記述がある。これとほぼ同じ説が、小松寿雄・鈴木英夫編『新明解語源辞典』（三省堂、2011年）の「鬼」の項目にも掲載されている。

さらに、『日本語源大辞典』の「物」の項目の語源説⑤に、「精霊、神、魔の義<日本神話の研究=松本信広・上代貴族生活の展開=折口信夫>」とあり、例として、「物の怪」という言葉が挙がっている（『日本語源大辞典』、増井金典著『増補版日本語源大辞典』（ミネルヴァ書房、2012年））。また、『旺文社古語辞典』第十版の「もの／物」名詞の項目①には、「物事。何か。言葉では言い表せない対象をさす」とあり、「もの」接頭辞の項目には、「はっきり言い表せないの意を表す。何がさせるのか。なんとなく……」とある。

以上、加門七海が関心を寄せる「鬼」は、言葉の起源をたどると、物の怪という言葉で一般的な「モノ」に行き着く。「モノ」は、言葉の指示する対象としてのそれが確実にはっきりとは言明できないため、事物一般として抽象化されてしまうのである。それは、その実体の本質が何であるかを隠蔽して名乗らず、その形象も明らかにしない。こうした「モノ」の特性の了解しやすい典型的事例として、古代から現代にいたるまで、死者の靈などが該当してきたのであった。「鬼」は、こうした「モノ」の自己隠蔽性を表す「隠ぬ」に当て嵌めた漢字が、字義として死霊を示していた「鬼」という漢字であり、この漢字の発音として、「おんぬ／おぬ」を適用させて、「鬼／おに」という言葉が定着した。鬼は死霊であり、同時に、それが誰であり何であるのか、その形象がどんなものなのか、自己を隠蔽する不気味な存在であり、恐怖を伴う。こうして鬼は、いつしか悪鬼として了解され、この了解が定着した。

加門七海は、しばしば著作のなかで、物の怪の存在を知覚することができるかと語り、それらに魅了され引きつけられると同時に、それらに近寄り強くなり関わったりしてはならない怖い存在である、と述べている。加門にとって物の怪は、魅惑と恐怖という両義的存在であり、そうした両義性を帯びるがゆえに、加門は物の怪の象徴としての「鬼」に対する関心を失うことがない。加門は、物の怪や鬼に、人生における納得しがたい苦悩とともに、善悪いずれでもありうる生命の躍動を看取しているのである。

現代社会において加門は、自己隠蔽性をもつ「鬼」に関心をもち続けているのであるが、これはむしろ例外であって、現代の大半の人々は、自分の周囲の様々な具体的事物を、それらが容易に名称化も形象化も可能であるにも関わらず、一括してモノ化してしまい、それらの実体や本質に対して関心を寄せず、それらの内実を問わず、また、知覚しようともせず、抽象化して、日常性や世界観や作り上げている。現代の大半の人々は、この営みを、ほぼ無自覚におこなっている。こうして彼らは無自覚に、自分の日常の世界のなかに、自ら進んで、物の怪や鬼を作り上げている、と云うことができよう。

人間と動物との共生的死生観：

「この儀式で気になることがあった。／僕が「人間なら死ぬところからスタートするのに、犬はそうじゃないですね？」と高村さんに尋ねると、高村さんは思案顔で「確かに死ぬところからじゃないですね。私にも理由はわかりません。」／「犬の名前は どうして わかったんですか？」／「犬の記憶から、飼い主が呼んでいるのが聞こえたんです。それでわかりました。犬ってちゃんと音を覚えているんだなと思いました」／「犬の霊は、これまで憑依した人間の霊とは別の世界にいたのですか？」／「いえ、人間と全く同じです。犬だけじゃなくて、猫や狸もいるんです」<sup>42</sup>。

「場面は犬がいる暗闇の世界に切り替わる。／ガリガリに痩せた犬が不安そうに佇んでいるのが見えた。あたりを見回す。「やっぱりここも人が多い」と高村さんは思った。／こことは、自殺した男がいた「カオスのような世界」のことだ。当然と言えば当然だが、狸や狐もいたというから、動物も人も死ぬば皆、同じ世界に行くのだろうか。日本人的な他界観を感じる」<sup>43</sup>。

「憑依」という言葉の用語法：

「「憑依」という言葉がよく使われるようになったのは戦後だが、その昔は「憑依」「憑く」「神がかり」「降りる」などといった言葉が使われていたというから、憑依という現象そのものは古くからあったのだろう。21世紀になった今も除霊の儀式を受ける人があるのは、時代が変わっても憑依される人が一定数いることを示している」<sup>44</sup>。

秋田県羽後町西馬音内地区西馬音内盆踊りにおける死者と生者の交流：

「境内では盆踊りが始まったようだ。／使わなくなった家族の着物を再利用した端縫いの衣装が舞う。／「彦三頭巾」という黒い覆面をかぶる踊り手と、編み笠を深くかぶった女性。どちらも顔が見えない。薪台の柔らかいかがり火に映えて、まるであの世から舞い戻った亡者のようにも見える。／これは西馬音内（にしもない）盆踊りである。／秋田県羽後町（うごまち）の西馬音内地区に700年ほど前から伝わる盆踊り……宮城県にある通大寺の境内で……2010年翌年の9月10日……滑りをよくするために砂を撒いたが、その砂は津波で被災した各地の海岸から集められたため、その日の境内は、津波に浚われた被災地の海岸になったという。その夜、西馬音内盆踊りは津波の犠牲者の追悼のための踊りになった。それ以来、毎年この境内で行われている。／黒い頭巾をかぶっているのは死者だろう。目深に編み笠をかぶった女性は生者だろうか。踊りながら、生と死が交わり、聖

42 奥野修司著『死者の告白—30人に憑依された女性の記録—』のうち、169～170頁。

43 奥野修司著『死者の告白—30人に憑依された女性の記録—』のうち、177頁。

44 奥野修司著『死者の告白—30人に憑依された女性の記録—』のうち、179頁。

と俗が交差する。高村さんの目に見えているのは、このような世界かもしれない。／踊りは「がんけ」と「音頭」があって、「音頭」は即興だという。／「即興で歌う歌詞の中に卑猥な文句がいっぱいあるんです。下ネタなんです。それに女性が反応するのを見て喜んでいる。あれで生命を燃えあがらせてるんですね。供養の後に卑猥な歌詞で盛り上がる。聖なるものと俗なるもの、生と死のカオスです。そこからほとぼしる何ものかこそ、震災を乗り越える生の力なのです」／まるで「あの世」と「この世」が溶けてひとつになったような夜だった。／かつての日本には、生者と死者が共に生きる文化があったように思う。／西馬音内盆踊りでなくても、お盆の時期になればお墓に故人が好きだった食べ物を供えたり、鴨居にご先祖の写真を掲げたり、子供が悪いことをすれば「ご先祖様がみているぞ」と叱ったりするのもそうだ。死者と共に生きる文化が、日本人の倫理観を形成してきたともいえる。かつて死者は、僕たちの身近にいた」<sup>45</sup>。

#### 付記

本稿は、相楽勉研究員が研究代表者を務める東洋大学井上円了記念研究助成の研究所プロジェクト「西洋思想の受容と日本思想の展開 ―キリシタン時代と明治期以後―」による研究成果の一部である。

#### キーワード

死生観、ファンタジー、幽玄、幽霊、霊性

---

45 奥野修司著『死者の告白—30人に憑依された女性の記録—』のうち、188～190頁。